

四人が川のふちまできたとき、今までだまってついてくるようなふうだった薬屋の子の音次郎君が、ポケットから大きな柿を一つとり出して、こう言った。

「川の中にいちばん長くはいつていたものに、これやるよ」

それを聞いた三人は、べつだん驚かなかった。だまりんぼの薬屋の音次郎君は、きみような少年で、とどき口をきると、その時みなで話しあっていることとはまるでべつの、へんてこなことをいうのがくせだったからである。三人は、なによりも、その賞品に注意をむけた。

つややかな皮を薄くむくと、すぐ水分の多いきび色の果肉があらわれてきそうな、形のよいかきである。みなはそれを、百匁柿ひゃくまねといっている。このへんでとれる柿のうちでは、いちばん大きいうまい種類である。音次郎君の家の広い屋敷には、柿や、みかんや、ざくろなど、子どもの欲しがらくだもの木がたくさんある。音次郎君がきみような少年であるにもかかわらず、友だちが音次郎君のところへ遊びにいくのは、くだものもらえるからだ。

ところで、賞品のほうはまず申し分なしとして、川のほうはどうであるう。秋もすえにちかいことだから、水は流れてはいない。けれどこの川は、幅がせまいかわりに、赤土の川床が深くえぐられていて、冷たい色にすんだ水が、かなり深くたたえられている。夏、水あびによくきたから、だいたい深さの見当はつくのである。へそのへんまでくるだろう。

三人はちよつと顔を見あわせて、どうしようかと目で相談したが、すぐ、やったるかと、やはり目で、話をまとめた。するともう、森医院の徳一君が、ズボンのバンドをゆるめはじめた。なにか、しがいのあるいたずらをするときのようになり、顔が輝いている。ほらふきの兵太郎君は着物だったので、まずかばんをはずして、しりまくりし、パンツをぬいだ。久助君も遅れてはならぬと、ズボンをぬいで、緑と黄のまじった草の上ですてた。

ぬいでしまうと、へんに下がるようになった。風が素足にひえびえと感じられる。徳一君を先頭に、川っぶちの草にすがりながら、川の中にすべりおりた。ひと足入れると、もう、ひざっこぶしの上まで、水がくるのである。

「つめたいなあ」

足から身内にあがつてくる冷気が、しぜんに三人に言わせるのであった。

柿がほしただけではなかった。今じぶん、おしりをまくって水にはいることが、おもしろいのだった。そこで三人は、上で見ている音次郎君にいわれるまでもなく、まん中あたりまではいっていった。案のとおりだった。水はひたひたとはい上がってきて、久助君のおへその一センチばかり下でとまった。

三人は、むきあって立って、じぶんのへそをあらためてながめたり、人のへそを観察したり、自分たちのさまのおかしさにクスクスわらったりした。しかし、ものをいうと、歯がカチカチ鳴って、みように力が背中に集まるような気がした。動くつめたさがいつそうひどく感じられた。

しばらくみなだまっていた。どこかで、日ぐれの牛がさびしげに鳴いた。それをしおに、徳一君が厳げん粛しゆくな表情になって、そろりそろりと岸の方へ動きだした。まだぬれていないところをなるべくぬらさぬように、ゆっくりいくのである。久助君と兵太郎君は顔を見あわせたが、もう笑わなかった。

久助君は二人りきりになると、このゆうぎはひどくばかげていると感じられたので、まだがまんすればできたのだが、勝ちを兵太郎君にゆずることにした。徳一君がしたように、そろりそろり岸の方へ歩みよって、草にすがって上にあがった。

草をふんで立つと、冷えのために、足の裏がしびれているのが、よくわかる。すぐ手ぬぐいで足から腰をふいて、パンツとズボンをはいた。体がふるえているから、ズボンをはくときよろけていって、やはりズボンははいっている徳一君にぶつかつた。

まだ兵太郎君は、川の中に入っている。もう勝ちをはかれにきまったのだから、なにも、やせがまんしているわけではないのだが、得意なところを人に見せたいのだろう。



《解答》

問一 柿がほしいだけではなかった。今じぶん、おしりをまくって水にはいることが、おもしろいのだった。

《評価のポイント》

- ・前半部がなくても可とする。

《解答例》

問二

生徒A 三人で顔を見合わせてからすぐに川へ入るためにズボンのバンドをゆるめた

生徒B どこかで日ぐれの牛がさびしげに鳴いた。

《評価のポイント》

△ 足から身内にあがってくる冷気が、しぜんに三人に言わせるのであった。

【理由】川へ入ってからのことを選択できているが、人物を取り巻く描写は風景とは言い切れないから。

△ 水はひたひたとはい上がってきて、久助君のおへその一センチばかり下でとまった。

【理由】人物以外の描写ではあるが、視野の狭い表現であり、「風景」のイメージから遠いから。

× 風が素足にひえびえと感じられる。

【理由】川へ入ってからのことではないから。

× しばらくみなだまっていた。

【理由】風景描写ではないから。

生徒C この川に入ることが、雰囲気楽しさを味わう行動だと考えた

《評価のポイント》

- ・遊びや楽しみ、という要素が入っていること

《解答例》

問三

「共感できる」・共感できない」

Dさんの書評の通り、リアルな友情が描かれている。他者と自分は異なる、という認識を持たないと、依存や反発を招いてしまうからだ。（六十字）

「共感できる」・共感できない」

Dさんの書評にある、リアルな友情という部分は共感できない。描かれている場面を友情と考へてはいけないと思うからだ。（五十六字）

《評価のポイント》

※書評とは、本や文章や作者に対する評価を書いた文章である。Dさんの書評でまとめの評価が書いてるのは、第一文の「少年たちのリアルな友情を、確かな設定とわかりやすい構成で表現した作品である。」である。よって、この部分に対する記述は正答からはずせない。

◎ Dさんの書評の第一文に対する立場が選択できて、それに対応する理由が書けている。

《解説》

『川』は昭和初期の文学作家新美南吉の小説である。作品歴からすると、『ごんぎつね』より後、『おぢいさんのランプ』よりも前になる。「久助君」という少年を主人公にした「久助もの」の一つである。少年特有の打算的な関係、意地を張り合う姿が関わり合いの中に感じられる。この我慢比べは、それからの少年たちの生活に暗い影を落としていく。複雑な家庭環境に育ち、おとなしい性格で少し体が弱かった南吉にとって、少年時代は決して輝かしい日々ではなかったことが、『川』に投影されていると思われる。

この文章は、本作の冒頭ということもあり、人物設定とそれぞれの行動や考え方の特色、季節、場面、状況などの状況が緻密に描かれていて、文章の展開や心情の流れを読み取るために適している。